

2009. 4. 18

志し半ばで散った名指揮者達 第1回
ジュゼッペ・シノーポリとマルチェッロ・ヴィオッティ

プログラム

今回は50代という働き盛りでこの世を去ったイタリアの二人の名指揮者、シノーポリとヴィオッティの演奏をご紹介します。ジュゼッペ・シノーポリは1946年生まれの子供の指揮者。1987年初来日での「復活」が評判となり一躍注目されるようになりました。大学で精神医学を修得したことからインテリ指揮者と見なされ、熱狂的なファンを作る一方、情熱的だが、細部まで分析的で面白くないといったアンチな音楽ファンもいました。しかし晩年は音楽に丸み加わり、音楽的な幅を広げていきましたが、2001年「アイダ」を指揮中に倒れ55才で急逝しました。亡くなるまでその地位にあったドレスデン国立管に加え、2002年からはドレスデン国立歌劇場の音楽監督就任が決まっていただけに、その早い死が惜しまれます。

マルチェッロ・ヴィオッティは1954年スイスに生まれたイタリア(両親はイタリア人)の指揮者です。オーケストラではザールブリュッケン放送響の黄金時代を築き上げ、オペラでは亡くなるまでフェニーチェ歌劇場の音楽監督の地位にありました。一方でウィーン国立歌劇場の常連でもあり、ウィーン・フィルとのアジアツアーの指揮者を任せられるなど、ウィーンとの関係も急接近していました。晩年は世界各国の歌劇場から引っ張りだこで、その多忙さが仇となった過労死とも言われ、2005年リハーサル中に倒れ50才の生涯を閉じました。ヴィオッティは「ヴィオッティ節」とでも言いたくなるような弾むようなリズム感としなやかに流れる音楽性が特徴でしたが、ヴィオッティの手に掛かると音楽が命を与えられたように動き出すのです。音楽は生きているんだと実感させられます。その早すぎる死が今もなお残念でなりません。私には1995年ウィーンで聴いた「トスカ」の感動的な名演が忘れられません。

リヒャルト・シュトラウス(1864~1949):

アルフス交響曲op.64 ~ 夜-一日の出-登り道-頂上にて-見えるもの-終結-夜

ジュゼッペ・シノーポリ指揮ドレスデン国立管弦楽団

(1998.9.22 ドレスデン、ゼンパー・オーパーでのLive)

リヒャルト・ワーグナー(1813~1883):

楽劇“ニュルンベルクのマイスタージンガー” 第一幕への前奏曲

ジュゼッペ・シノーポリ指揮ドレスデン国立管弦楽団

(1998.1.24 サントリーホールでのLive)

グスタフ・マーラー(1860~1911):

交響曲第2番ハ短調“復活” ~ 第1楽章から、第5楽章から

ユリア・ヴァラディ(ソプラノ)/ワルトラウト・マイアー(メゾ・ソプラノ)

ジュゼッペ・シノーポリ指揮フィルハーモニア管弦楽団/東京音楽大学合唱団

(1987.1.16 サントリーホールでのLive)

*** 休憩 ***

ロベルト・シューマン(1810~1856):

交響曲第3番変ホ長調op.97“ライン” ~ 第1楽章、第4楽章から、第5楽章

マルチェッロ・ヴィオッティ指揮ザールブリュッケン放送交響楽団

(1994.1.28 ザールブリュッケン、コングレスハレ大ホールでのLive)

ガエタノ・ドニゼッティ(1797~1848):

歌劇“ロベルト・デヴリユー” ~ 序曲、第1幕の二重唱、第3幕女王の狂乱の場

エディタ・グルベローヴァ(ソプラノ)/ラモン・ヴァルガス(テノール)

マルチェッロ・ヴィオッティ指揮ウィーン国立歌劇場管弦楽団及び合唱団

(2000.12.7 ウィーン国立歌劇場でのLive)

イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971):

舞踊組曲“火の鳥” ~ 王女たちのロンド-魔王カスチエイの兇悪な踊り-子守歌-終曲

マルチェッロ・ヴィオッティ指揮ザールブリュッケン放送交響楽団

(1993.9.26 ザールブリュッケン、コングレスハレ大ホールでのLive)